様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：３４４１８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０５８３

研究課題名（和文）近年の英語学研究に基づく高校生・大学生のための学習英文法研究

研究課題名（英文）Studies on Pedagogical English Grammar for High School and University Students Based on Recent English Grammatical Studies

研究代表者
岡田　伸夫（OKADA, Nobuo）

関西外国語大学・英語キャリア学部・教授

研究者番号：２００９３３４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究により、(1) 近年の英文法研究の成果を参照して現行の学習英文法の不備や欠陥を明らかにし、(2) 現行の学習英文法のどこをどう変えれば日本人高校生・大学生にふさわしい学習英文法が構築できるかを具体的に示し、(3) 学習者の英文法学習を促進するイディオム、文法構文、談話、語用論、言語変種の用例を収集することができた。さらに、(4) 日本人高校生・大学生にとって望ましい学習英文法の枠組みについての考察も深めることができた。

研究成果の概要（英文）：This research has (1) shown inadequacies and defects of the current pedagogical English grammars, (2) examined how the current pedagogical English grammars should be improved to help Japanese learners of English at high school and university facilitate their grammar learning, and (3) collected authentic and useful examples of idioms, grammatical constructions, pragmatic principles, and linguistic variations. It has also gained some significant knowledge about the useful theoretical framework of pedagogical English grammars for Japanese learners at high school and university.

研究分野：日本人英語学習者のための学習英文法

キーワード：学習英文法　英文法研究の英語教育への応用　英文法教育　外国語としての英語の教育

１．研究開始当初の背景

外国語としての英語の教授に際しては、学習者のモチベーション、英語を使うニーズ、英語との接触量（インプット量）、英語学習開始時期などを考慮すると、明示的、非明示的の別を問わず、英文法指導が不可欠であることを疑う余地はない。しかし、英文法指導に関しては、英語教育家の考えは、(1) 必要と考え、伝統的な英文法の内容を伝統的な教授法に従って教えることを是とする考え方と、(2) コミュニケーション能力を育成するには英文法指導はできるだけ少ないほうがよいと考える考え方に二分される傾向がある。しかし、その二つの考え方の間には、(3) 英語コミュニケーション能力を開発するには、今までの伝統的な英文法を伝統的な方法で教え続けるのではなく、正しい英文法を分かりやすく教えることが不可欠と考える考え方がある。私には 3 番目の考え方が最善と思われるが、この 3 番目の考え方に沿った研究や実践はあまり進んでおらず、最初の 2 つの考え方の間の不毛な論争に明け暮れする状況があった。

２．研究の目的

本研究は、近年の英語学研究の成果に基づき、日本人高校生・大学生のための学習英文法を構築することを目指すものである。具体的には次の四つの目標を設定した。

(1) 形態論、文法構文、談話、語用論等に関する近年の英文法研究の成果を参照し、現行の学習英文法の不備や欠陥を明らかにする。

(2) 現行の学習英文法のどこをどう変えると日本人高校生・大学生にふさわしい学習英文法ができるかについて考察する。

(3) 文法事項をわかりやすく説明することのできる、語、句、文法構文、談話、語用論、言語変種等の用例を多数収集する。

(4) 学習英文法はどのような枠組みであるべきかについて考察する。

３．研究の方法

現在、日本で使われている高校生・大学生のための学習英文法の内容とその指導法に内在する問題点を明らかにしたうえで、教えるべき英文法の内容とその指導法の改善案を提示するという目的に沿って以下の五つのことを実行する。

（1）英語のさまざまな文法構文の意味を明らかにする国内外の文献を読み、さまざまな文法構文に対する深く正しい理解を得る。

（2）関西外国語大学公開講座「英語教員のための夏期リフレッシャーコース」に参加した現職英語教員の方と、現在、英阪神の高校で英語を教えている教員の方に、教室でどのような英文法指導をしているか、英文法教材を使っているかいないか、使っている場合には、市販のものを使っているか、手作りのものを使っているか、英語で英文法指導をしているかなどをアンケートにより調査する。

（3）海外協定校である米国北テキサス大学とアラバマ大学の教員が、関西外国語大学で実施している英語の授業を観察し、日本語環境における英語教育について授業担当教員と情報・意見を交換する。

（4）海外協定校である米国北テキサス大学と西オーストラリア大学を訪問し、英語環境の中で英語を学ぶ海外留学生のための英語の授業を観察し、そこの教員の方と、英語環境における英語教育と、外国語（日本語）環境における英語教育に関する情報や意見の交換を行う。

（5）文法構文の正確な意味を広く英語学習者に教えるために論文、特に実践的な論文をできるだけたくさん執筆する。また、たくさんの論文を執筆することによって、学習者が知らない重要な文法の知識を学習者にわかりやすく伝えるための文章表現を工夫する。

４．研究成果

本研究の主な成果は以下の 7 点にまとめることができる。

（1）*The Japan News*（読売新聞社発行の英字新聞）に、主として、形態論、文法構文、談話、語用論に的を絞った小論文を、月 1 回のペースで発表した。科研費助成を受けていた 4 年間に *The Japan News* に掲載された小論文の数は 48 件に上った。

（2）大修館書店『英語教育』（月刊誌）の読者の質問に回答するコーナーで、英語学習者が抱く英文法に関するさまざまな質問を取り上げ、近年の英文法研究の成果を踏まえてそれらに回答した。2017 年度に『英語教育』に掲載された小論文の数は 8 件に上った。

（3）大学英語教育学会関西支部の機関誌（*JACET Kansai Journal*）に論文を 1 件発表（共著）した。論文のタイトルは、「学習英文法の研究とその英語教育への応用」である。本論文は同学会関西支部の機関誌編集委員会の依頼を受けて執筆したものであるが、科研費助成を受けた本研究（課題：近年の英文法研究に基づく高校生・大学生のための学習英文法研究）の特徴を具体的に映し出すものと言ってよい。さらに、英語教育にかかわる 2 件の図書にそれぞれ 1 件ずつ、英文法研究の英語教育への応用について考察した論文を発表した。『日本の言語教育を問い直す―８つの異論をめぐって』という図書に掲載さ

れた論文のタイトルは、「英文法教育の目的と内容と方法」であるが、なぜ英文法を教えるのか、どのような内容をどのように教えたらよいのかという根本の問題について論じたものである。また、『英語教育徹底リフレッシュ—グローバル化と 21 世紀型の教育』という図書に掲載された論文のタイトルは、「学習英文法の内容の改善をめざして」である。本論文では、学習英文法にはどのような内容を盛り込むべきかについて具体例をあげて論じた。

（4）学会や研究会で口頭発表を 2 件（うち 1 件は共同発表）、講演（基調講演と招待講演と特別講演）を 7 件、関西外国語大学の公開講座で英語教員向けの講義を 4 件行った。また、2014 年 11 月に学習院大学で開催されたシンポジウム「言語系学会は、学問研究の成果を、今、どのような形で社会に還元することができるか？—言語教育への貢献を巡って」の司会を務めるとともに、「英文法研究の成果を大学英語教育に活かす」というタイトルの口頭発表を行った。このシンポジウムは、言語系学会連合と日本英語学会が公開特別シンポジウムとして共催したものであるが、英語専攻者だけでなく、それ以外の言語の専攻者や英語教育関係者が多数参加したこともあり、Q&A のセッションではフロアから多彩な質問やコメントが寄せられた。このシンポジウムは、言語系の諸学会は、言語教育などを通していかに社会に貢献できるかという問題を正面から取り上げた公開講座であり、大変有意義であった。

（5）科研費助成による 4 年間の研究期間中、毎年開講されていた関西外国語大学公開講座「英語教員のための夏期リフレッシャーコース」で、公開講座に参加された現職英語教員に英文法指導の実態に関するアンケート調査を行った。現在の中学校、高等学校における英文法指導の実態を示す貴重な資料が得られた。

（6）関西外国語大学の海外協定校である北テキサス大学と西オーストラリア大学を訪問し、そこで開講されている、海外からの留学生に英語環境の中で英語を教える授業を観察した。また、上記の 2 大学の英語教員と文法教授について情報、意見交換を行った。さらに、日本人英語学習者が英文法学習時に作り出す文法上の誤りをいくつか取り上げ、それらの誤りの背後に日本語があることを示した。出席していた上記の 2 大学の英語教員の中には、日本人留学生に英語を教えた経験を持っている方もおられ、たくさんの質問やコメントをいただいた。また、北テキサス大学では、インテンシブ・イングリッシュ・ランゲージ・インスティテュートの所長のお計らいで、そこで英語の授業を受講している関西外国語大学の学生たちから授業の様子を聞くことができた。そこから日本人大学生が文法学習についてどのような意識を持っているかを知ることができた。

（7）科研費助成による 4 年間の研究期間中に執筆した論文を集め、研究成果報告書として刊行した。同報告書は、「近年の英語学研究に基づく高校生・大学生のための学習英文法研究」という領域で優れた研究をしている研究者と、このテーマに関心を持っている高校英語教員と大学英語教員に送付し、批判を仰いだ。その方たちからいただいたコメントは、今後の研究の方向を探るのに有益であった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 57 件）

①岡田 伸夫　他、学習英文法の研究とその英語教育への応用、*JACET Kansai Journal*、査読無、No.20、2018、11-22

②岡田 伸夫、If you're a Scottish lord, then I am Mickey Mouse.、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 24209、2018、p.8

③岡田 伸夫、補語の働きをする関係代名詞とその先行詞の前に現れる定冠詞 the について、大修館書店『英語教育』、査読無、第 66 巻第 13 号、2018、pp.79-81

④岡田 伸夫、文中の語の連鎖を１つの複合語に変えて使う、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 24174、2018、p.8

⑤岡田 伸夫、A is＋独立属格／所有代名詞＋to 不定詞構文、大修館書店『英語教育』、査読無、第 66 巻第 12 号、2018、pp.81-82

⑥岡田 伸夫、(just) in case＋節と just in case、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 24140、2018、p.8

⑦岡田　伸夫、These non-native animals and plants crowd out the native species. の crowd out について、大修館書店『英語教育』、査読無、第 66 巻第 10 号、2017、pp.79-81

⑧岡田 伸夫、分裂文や存在文で、主語として働く関係代名詞が省略される場合、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 24107、2017、p.8

⑨岡田 伸夫、潜伏感嘆文の前の前置詞の省略、大修館書店『英語教育』、査読無、第 66 巻第 9 号、2017、pp.82-83

⑩岡田 伸夫、make one's way とその拡張形、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 24073、2017、p.8

⑪岡田 伸夫、「A であってもなくても」を表すいろいろな表現、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 24039、2017、p.8

⑫岡田 伸夫、従属節中の非制限的関係詞節の断定者、大修館書店『英語教育』、査読

無、第 66 巻第 6 号、2017、pp.83-85
⑬岡田 伸夫、文型に関する３つの質問、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 24005, 2017、p.8
⑭岡田 伸夫、前文を意味上の主語とする現在分詞構文、大修館書店『英語教育』、査読無、第 66 巻第 5 号、2017、pp.81-82
⑮岡田 伸夫、「前置詞＋副詞節」か「前置詞＋（省略された先行詞）＋関係詞節」か、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 23971、2017、p.8
⑯岡田 伸夫、grab somebody by the arm と gram somebody's arm、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 23937、2017、p.8
⑰岡田 伸夫、主語の関係代名詞が省略されるもう１つの環境、大修館書店『英語教育』、査読無、第 66 巻第 3 号、2017、pp.79-81
⑱岡田 伸夫、smile a happy smile―同族目的語の働き、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 23903、2017、p.8
⑲岡田 伸夫、「アメリカにはどの国から来た人が多いのか」を英語でなんと言うか、大修館書店『英語教育』、査読無、第 66 巻第 2 号、2017、pp.83-84
⑳岡田 伸夫、an astounding five million women の an はなぜ付くのか、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 23865、2017、p.8
㉑岡田 伸夫、Because why not?の意味と用法、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 23837、2017、p.8
㉒岡田 伸夫、because に修辞疑問文が続くケースとは？、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 23810、2017、p.8
㉓岡田 伸夫、関係節の中で主語と動詞が倒置する場合、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 23783、2017、p.8
㉔岡田 伸夫、It is X that Y.の Y に読み手が知らない情報が出てくる場合とは？、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、 No. 23756、2016、p.8
㉕岡田 伸夫、I was as poor as it's possible to be.の構造と意味、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 23729、2016、p.8
㉖岡田 伸夫、「the 比較級 ... , the 比較級 ...」構文とその応用、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 23702、2016、p.8
㉗岡田 伸夫、過去のある時点から見た未来の出来事、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 23675、2016、p.8
㉘岡田 伸夫、「Tough 移動」の話、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 23647、2016、p.8
㉙岡田 伸夫、「topicalization」と「sluicing」の規則を適用した文の構造、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 23620、2016、p.8
㉚岡田 伸夫、Voldemort was nowhere near as bad.の nowhere near について、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 23592、2016、p.8
㉛岡田 伸夫、Are you as big a fool as I think you must be?はどう訳すか、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 23565、2016、p.8
㉜岡田 伸夫、構文 A is to B what C is to D. とその応用例、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 23538、2016、p.8
㉝岡田 伸夫、同じもの・ことを違う表現で表すのはなぜ？、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 23509、2016、p.8
㉞岡田 伸夫、Anita talked Fay into another cup.の動詞 talk に続く Fay は目的語か、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 23481、2017、p.8
㉟岡田 伸夫、It looked like no key she had ever seen.はどう訳せるか、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 23454、2016、p.8
㊱岡田 伸夫、stop at nothing と go to any length(s)、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 23427、2016、p.8
㊲岡田 伸夫、「所有格（代）名詞十他動詞過去分詞＋名詞」の過去分詞の行為者は誰か？、読売新聞社 *The Japan News*, 査読無、No. 23400、2015、p.8
㊳岡田 伸夫、as if に続く句の種類と as if 句の意味、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 23373、2015、p.8
㊴岡田 伸夫、「what 節＋be 動詞＋補語」構文の意味、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 23346、2015、p.8
㊵岡田 伸夫、複合形容詞を比較級、最上級にするにはどうしたらよいか？、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 23319、2015、p.8
㊶岡田 伸夫、X has more than halved は「X が半分以上になった」という意味か？、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 23292、2015、p.8
㊷岡田 伸夫、I'm gonna make an angel out of you.の構文をどう理解するか、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 23264、2015、p.8
㊸岡田 伸夫、The situation went from bad to worse.の構文をどう理解するか、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 23237, 2015、p.8
㊹岡田 伸夫、a lost purse と言うのに the found purse となぜ言わないのか？、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 23210、2015、p.8
㊺岡田 伸夫、if so の so が指すものは何か?、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 23183、2015、p.8
㊻岡田 伸夫、What do you mean, where the hell have I been?の話法、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 23133、2015、p.10

㊼岡田 伸夫、語句選びに迷いがあることを示す表現、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 23106、2015、p.10
㊽岡田 伸夫、驚きや意外性を表す構文、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 23078、2015、p.10
㊾岡田 伸夫、What's the difference how long it takes?の成り立ちと意味、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No.23051、2014、p.10
㊿岡田 伸夫、Gonna find out who's naughty and nice の who の品詞と文法上の数、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 23023、2014、p.10
51 岡田 伸夫、There is の後ろに定名詞句が現れる事例、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No.22996, 2014、p.10
52 岡田 伸夫、TV is about the last thing an aspiring writer needs.：副詞 about の用法、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 23969、2016、p.10
53 岡田 伸夫、knee-high grass と knee-deep water、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No.22935、2014、p.10
54 岡田 伸夫、最高値を表す as … as can be とそのバリエーション、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 23908、2016、p.10
55 岡田 伸夫、What should appear to my wondering eyes but a miniature sleigh and eight tiny reindeer、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 22881、2014、p.10
56 岡田 伸夫、As soon as I had recovered from my illness, what must I do but break my leg?、読売新聞社 *The Japan News*、査読無、No. 22854、2014、p.10
57 岡田 伸夫、such that 節の 4 つの用法、読売新聞社 *The Japan News*, 査読無、No.22827, 2014、p.10

〔学会発表〕（計 10 件）
①岡田 伸夫、Content-based の英語教育の中での文法指導の在り方—大学英語リーディング教科書の文脈・場面を利用して文法を指導する、大学英語教育学会第５回英語教育セミナー、2017.11.4、関西外国語大学（大阪府）
②岡田　伸夫、学習英文法の内容と指導法の改善のために、岐阜県英語の教え方研究会、2017.5.29、蘇原コミュニティーセンター（岐阜県）
③岡田 伸夫、場面・文脈を利用して文法を指導する、大学英語教育学会授業学（関西）第 12 回研究会、2017.5.13、関西外国語大学（大阪府）
④岡田 伸夫、他、日本人英語学習者のための英語構文の研究、第 3 回関西外国語大学 IRI 言語・文化研究フォーラム、2017.2.16、関西外国語大学（大阪府）
⑤岡田 伸夫、文法がスピーキングに役立つのはどこまでか、大学英語教育学会関西支部秋季大会、2016.11.26、関西外国語大学（大阪府）
⑥岡田　伸夫、英文法教育が英語教育に貢献できる三つのこと、関西大学大学院院生合同学術研究大会、2016.11.25、関西大学（大阪府）
⑦岡田　伸夫、何のための英語教育か—大学英語教育が目指すべきこと、長崎大学言語教育研究センター主催大学英語教育講演会、2015.3.25、長崎大学（長崎県）
⑧岡田 伸夫、教育における縦と横の連携—英語教育の連携を中心に、大学英語教育学会英語教育セミナー、2014.12.6、愛知大学（愛知県）
⑨岡田 伸夫、大学生に対する文法指導、授業学フォーラム第 3 回講演会、2014.6.28、関西外国語大学（大阪府）
⑩岡田 伸夫、英文法研究の成果を大学英語教育に活かす、言語系学会連合・日本英語学会公開特別シンポジウム、2014.11.8、学習院大学（東京都）

〔図書〕（計 2 件）
①岡田 伸夫　他、開拓社、英語教育徹底リフレッシュ—グローバル化と 21 世紀型の教育、2017、332 (178-189)
②岡田 伸夫　他、三省堂、日本の言語教育を問い直す—８つの異論をめぐって、2015、465 (207-216)

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
岡田　伸夫（OKADA, Nobuo）
関西外国語大学・英語キャリア学部・教授
研究者番号：20093346

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）